

『郷土の先人に学ぶ』（上巻）から

法曹界のリーダー

奥山八郎



生誕の地（亀津村）

一八六八年、二百数十年続いた江戸幕府が倒れ、明治の新政府が発足しました。新政府は、これまでの鎖国政策を改め、進んで西洋の文化を取り入れることに努めました。西洋の文化がどんどん輸入されると、人々の生活の姿も大きくかわっていきました。人々は、これを文明開化といつて、もてはやしました。

一方、国内では、今まで続いた士・農・工・商という厳しい身分制度の差別をなくし、平等な世の中にしようとの努力もなされていきました。今まで、男はみんなチョンマゲを結っていましたが、その結い方にも、武士と武士でない者には違いがありました。ところが、明治の新政府は、このチョンマゲを切り落とすようにと命令を出しました。これを断髪令だんぱつれいといいます。

人間が長い間の習慣を一朝一夕にして改めるといふことは大変なことです。髪かみの結い方によって自分の身分を誇ることのできる武士はもちろん、農民の中にも、チョンマゲを切ることに反対する人がたくさんいました。ところが、徳之島の亀津では、断髪令が出ると、さつさと髪を切り、他の人々にも断髪するよう呼びかけた人がありました。

山徳峰やまとくほうという人です。彼は、江戸から千数百キロも離れた南の島にありながら、日本はもちろん中国の学問（漢学）も身につけ、絵をかくことにも優れた学者でした。知識が広く、何事

にも積極的な彼は、人々から尊敬され、信賴されていましたので、亀津の人々は、彼に倣^{なま}つて他の村や他の島よりもいちはやく断髪することになりました。

その後、だれが言うともなく、積極的に新しいものを取り入れていこうとする進取^{しんしゅ}の精神を「亀津断髪」ということばで表すようになりました。これは、またそのまま亀津の人々に対する誉め言葉でもあつたのです。

生　い　た　ち

奥山八郎先生は、父奥道、母タフの四男として、明治一九年に亀津で生まれました。男五人女二人の七人兄弟です。奥山先生は、亀津断髪といわれる進取の氣に満ちた亀津の地に生を受け、山徳峰の精神を受け継いで育ちました。こうした精神的環境は、先生に大きな影響を与えました。

八郎先生の功績

大正三年、東京帝国大学（今の東大）法学部を卒業。当時、国民の義務であつた軍隊生活を

終えると法律関係の職に就き、大正七年に判事になりました。しかし、思うところがあつて、わずか三年で判事をやめ、大正十年には弁護士になりました。

先生が法曹界（法律事務をとりあつかう仕事）にあつて社会のために尽くされた功績の大きなことは言うまでもありませんが、奄美の日本復帰実現のために努力されたことを私達は忘れることができません。奄美の島内、島外にいる四十万人の人々が心を一つにして努力した復帰運動、その先頭に立つた先生の、片寄らず、激せず、ねばり強い指導方針は、人々に絶大な信頼を得ました。

この民族自決の大運動は、やがて世界の人々の心を動かし、ついに昭和二十八年十二月二十五日、奄美の住民の悲願であつた日本復帰を実現をすることになるのです。

また先生は法曹界では忘れてならない人でした。世の中は、ふとしたはずみで罪を犯した人、また無実の罪に苦しんでいる人々などがいます。そのような人々のよい相談相手となつて、正しい裁判が行われるようにするのが弁護士の仕事です。でも弁護をしてもらうにはお金が必要で、それで、世の中には経済的に恵まれないため、弁護士を頼む費用のない人もいます。これでは公正な裁判は望めません。

昭和二十六年、先生が日本弁護士連合会会長のときに、財団法人日本法律扶助協会を設立し、経済的に恵まれない人々にも公正な裁判が受けられるようにしました。正義感と思いやりの心

の深い人でした。

また、先生は、進学のために郷里から上京した人々の面倒もよくみてくれました。仕事の世話や経済面への配慮など、親身になってやって下さいました。

弁護士時代忘れてならないことに、こんな話があります。

昭和の初めの頃、一部の軍人や民間人が、時の政治家や実業家を襲撃しゅうげきするという事件が次々と起こりました。昭和七年の血盟団事件、犬養首相等を暗殺した五・一五事件、昭和八年の神兵隊事件、昭和十一年、前首相で内大臣の斎藤実等せいでを暗殺した二・二六事件などがそれです。これらの歴史的な大事件において奥山先生は主任弁護士として活躍しました。

また、第二次世界大戦後の昭和二十一年、極東国際軍事裁判で、A級戦犯海軍大将永野修の弁護に当ったことも有名です。

栄誉の饗饌会きやうせんかいと観菊会

昭和三年十一月、司法省での天皇陛下の饗饌会に奥山先生は招かれました。四十二歳の時です。一弁護士が、この若さで、このような栄誉を受けたことはめずらしいことで、多くの同僚から羨うらやましがられました。

また、昭和十一年十一月には、天皇、皇后両陛下の催される新宿御苑の観菊会にも招かれました。春の観桜会とあわせて毎年光榮に浴した先生、このような例は、奄美出身の先輩はもちろん、鹿児島県下でも数少ないことなのです。

受勲と先生のお人柄

昭和四十年秋、先生は勲一等に叙せられ、瑞宝章を贈られました。七十九歳の時です。このことは、徳之島はもちろん、奄美全体にとっても大きな喜びであり、名誉でありました。

関東方面では、さつそく里嘉榮則、瀬田良市の両氏を中心にして、先生の受勲を祝い、あわせて奄美同胞として先生の功績を顕彰しようとの計画が進められました。関西では、前田村清氏と筆者が推進役として協力することになりました。このことを公にする前に先生ご本人の意向を確かめることが先です。それで前田氏を通して受託して下さいようお願いしましたところ、私事で全郡的にご迷惑をかけることは意に反するとして、固く辞退されました。それで、遂に祝賀顕彰のことはとり行われなくなりました。

それでも、関西の徳之島出身者の間では、何とかして自分達の喜びを表したいとの気持ちが高まり、その計画は、前田氏と筆者に任せられましたので、今回は先生の意中を察し、事が大

げさになることを避け、徳之島出身者だけで、顕彰の方法を考え、喜びの意を表したいと率直に申し上げました。しかし、この案も先生はなかなかお受けになりません。

小さな徳之島に生まれ、素足^{すあし}で走り回り、芋^{いも}を食い砂糖きびをかじって育った同胞に、先生のように大人物となり国家社会に貢献^{こうけん}する人材のあることは大きな喜びであり、また先生を島の先輩と呼べるのは、後輩にとつては、大きな誇りであります。次代の青少年を励ますという意味で、ぜひとも祝賀顕彰の件をご承諾いただきたいと、繰り返しお願いしましたところ、ようやく黙認^{もくにん}を得ることができました。このことから、私どもは、先生の謙虚^{けんきょ}なお人柄を改めて知らされると同時に、つまましい先生の人徳をしのぶことができるのです。

胸像の立つ丘

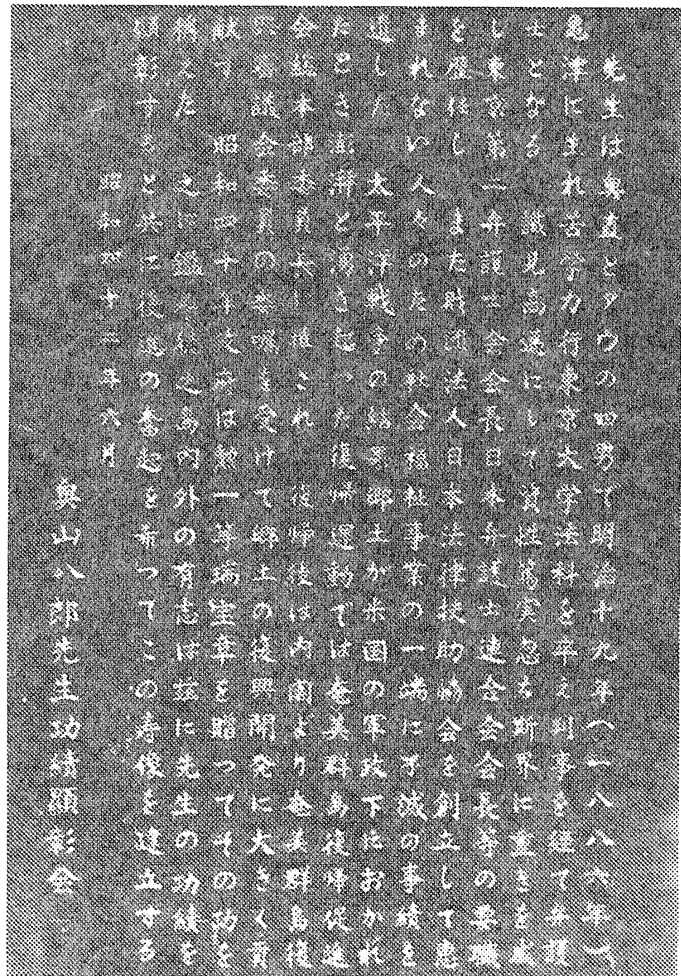
その後ただちに、私どもは、西はもちろん、関東、鹿児島および地元徳之島へも経過を報告して協力を要請しました。

先生の胸像は、関東の委員を経て、東京の大家に発注し、碑石の設計は関西でやることになり、尼崎市の石材会社に作製させ、昭和四十二年の六月初め、亀津へ発送して建立作業に取りかかることになりました。

建立の場所については、亀津の町中という意見もありましたが、それでは徳之島^{こぞ}挙つて建立する意味が薄^{うす}らぎます。それで、徳之島全島の生徒が勉学する県立徳之島高等学校内と決定し、県の承認を得て現在の位置に建立されたのです。胸像は徳之島高等学校の校門を入ると高い右手の丘に南の方に向つて立ち、柔和^{にやわ}なお顔と優しい眼差^{まなざ}しが、後に続く若者にそそがれているような気がします。

昭和四十二年六月十九日、午前十時、いよいよ晴れの除幕式が挙行されました。奥山先生はたね子夫人同伴でご臨席、全島から官民多数の参列を得て、まれに見る盛儀でした。徳之島における胸像の建立はこれが初めてのことでした。島の人々の誇りを伝える貴重な文化遺産ともなり得るものと思います。

式が済んでから、先生は徳高グラウンドの一角にがじゅまるの木を記念に植樹されましたが、その木は、今は根を張り枝を伸ばして蔭をつくり、緑陰に書を読む高校生の姿も見かけるようになりました。



文 碑

小雨の中での植樹の場面や、公民

館での盛大な祝賀パーティーなど、

今はありし日の先生を偲ぶだけです。

さわらべに幕はひかれて

お像見ゆ いさおし香る

ふるさとの丘

永 保

追 想

除幕式の前日の午後、空港に到着した筆者は、まず、徳之島観光ホテルに先生を表敬訪問しました。先生ご夫妻は、「ほんとによくやってくれた、お世話になった、ご苦労さんでした。」と繰返しおっしゃいました。その喜びの表情には、思わずほろりとさせられました。

久しぶりのご帰郷とあってか、話題は、もっぱら昔の亀津村のあれこれでしたが、中でも熱っぽく話されたのは、大先輩山徳峰のことでした。全島中の人々から「亀津断髪」の愛称で亀津人士を呼ばしめたのは、実にこの人なのです。「亀津断髪は即徳峰精神だよ。」とお話になり

ました。

お話の途中、西方に目を向けられ、「お社やしろにも長いこと参詣していないね、村しまの人には、単におやしろと呼んでいるが『麦穂之峰高千穂神社』という正統な呼び名があるのだよ。」とも話されました。「祭神ではないが、学問の神様菅原道真にあやかる気持ちで、少年達は、参拝後、社殿や木蔭で本を読んだりしたね。」と遠い昔のことなどもお話になりました。

「散歩がてらに二人でお参りしよう。」とおっしゃたので、お伴しました。大瀬橋を渡って徳之島警察署前に差しかけると、「この広い通りは仮屋かやの馬場ばと呼んだが藩政時代に役人の詰所があったのでそう呼ばれたのだ。」と地名のいわれを教えて下さいました。「参道の付近は麦穂むぎなの降り口と言ったが、もう通用していないだろう。」と昔を追憶なさいました。高くて長い階段を登りつめて参拝した後、境内南端の日露戦争での勇士の慰霊碑もつに詣でました。「この戦争で二〇三高地の攻略戦に戦功をたてて帰られた亀津の鶴永吉豊さんは、徳之島で最初に金鷄きんし勲章くんしちの榮譽に浴した人だ。」とも話されました。

参道を降りる道すがら、「この道を通ることはもうあるまいね、この歳では、」としんみりした口調で言われました。昭和四十二年六月十八日のたそがれ時のことでした。

ふる里の麦穂の峰の岩肌にみどり絶さぬ松ぞ雄々しき

永保

胸像の除幕式を終えて二か月を経ない八月の十日過ぎ、先生から、今夜、梅田の新阪急ホテ

ルに来るようにと電話連絡をいただきました。早速参上すると、「今日は別に用件はないが、先の胸像建立で関西の皆さんには大変お世話になったのでお礼のあいさつもしたいが、それは改めてすることにして、今日は世間話でもしよう。」とのことでした。

「きみは子どもが五人もいて幸せだ。ぼくには子どもがいないので、年をとるとちよつと寂しいよ。」と行く末を気にしておられるご様子でした。先生は七人も多い兄弟がおりましたが、たね夫人との二人の間には子どもが恵まれませんでした。たね夫人は鹿児島市のお生まれで、家庭にあつては内から先生の活動を助けた立派なお方です。終生、先生とお二人の仲むつまじい平和な家庭生活を送られました。

話が色々とはずみ、「徳之島高等学校に対しては、お礼の意味で、私の持っている本を寄贈したい。さいわい、前田君が建ててくれた図書館もあることだし。」とのお話もありました。

私が、「胸像建立資金の残りがありますので、先生を記念する何かに当てたいと在じます。」と申し上げると、「ぼくに氣遣いしないでいい、徳之島高校のたを考えてもらえば結構だ。」とのことでした。それで、先生のご意向に沿って前田氏とも相談のうえ、徳之島高校に贈りました。

弔ちよう

辞じ

ああ、お呼びしてもお応えはなくなりました。奥山先生のみ霊の御前に伏し謹んでお別れを申し上げます。

先生の御逝去せいきよの知らせを受けました郷里徳之島にはたちまちにして暗雲垂れこめ、島の人々と共に本土各地の後輩達は涙に泣きぬれて声もなく、ただありし日を偲しのびながら哀悼あいとうの意を表しております。

先程来述べられた弔辞にもございました通り、法曹界は申すに及ばず、その他の社会活動でも数々の事績と多くの思い出を残されました。その一つ一つは、これみな私達後輩へ垂たれ給たまいし無言の教訓として胸裡きょうりに深く刻み込まれ、未来へ延々と語り継がれ、次代の人々を励まし、処世の指針として崇敬すうけいの念を集めることでございましょう。

この教示に浴して、先生を恭敬きやうけいする徳之島内外の有志は寿像じゆざうをお贈りして感謝の意を託したのでありました。その除幕式には奥様と共に元気なお姿で、ご臨席いただきまして、列席者一同は大変喜んだのでありました。それが六月半ば過ぎのことでございます。あの時が懐なつかしい故郷ご訪問の最後となり、お伴申し上げたいいろいろな場面が目にはらついて離れません。

それから二か月経った八月半ば、大阪にお見えになりました時、二人だけでゆつくり語ろう

とおつしやつた新阪急ホテルの二晩を思い出し、こみ上げる涙と嗚咽おえつの声を押さえながら、ここに改めて寿像の碑文ひふんを披露ひろうさせていただいて、ご参葬さんそうの皆様と共にご冥福めいふくをお祈り申し上げ弔辞と致します。

昭和四十二年十月五日

関西法州郷友会代表 及川 永保

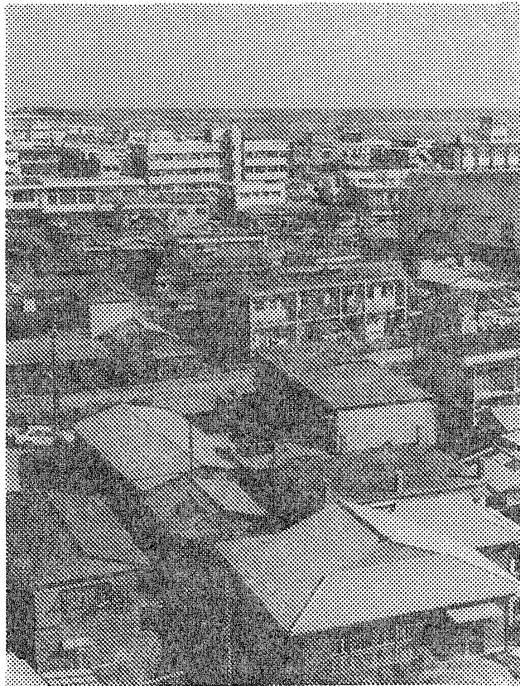
奥山のみ霊たまやすめと祈りしてお像にしのぶや復帰のことも

永保

執筆者 及川 永保



徳高に立つ胸像



現在の亀津